

かみやかみぎり  
神谷上切遺跡

所在地 豊田市下山田代町神谷上切地内  
(北緯 35 度 1 分 34 秒  
東経 137 度 18 分 6 秒)

調査理由 豊田・岡崎地区研究開発施設用地  
造成事業

調査期間 平成 25 年 12 月～平成 26 年 1 月

調査面積 100 m<sup>2</sup>

担当者 成瀬友弘・米満武

調査経過 豊田・岡崎地区研究開発施設用地造成に伴う事前調査として、愛知県企業庁より委託を受けて実施した。

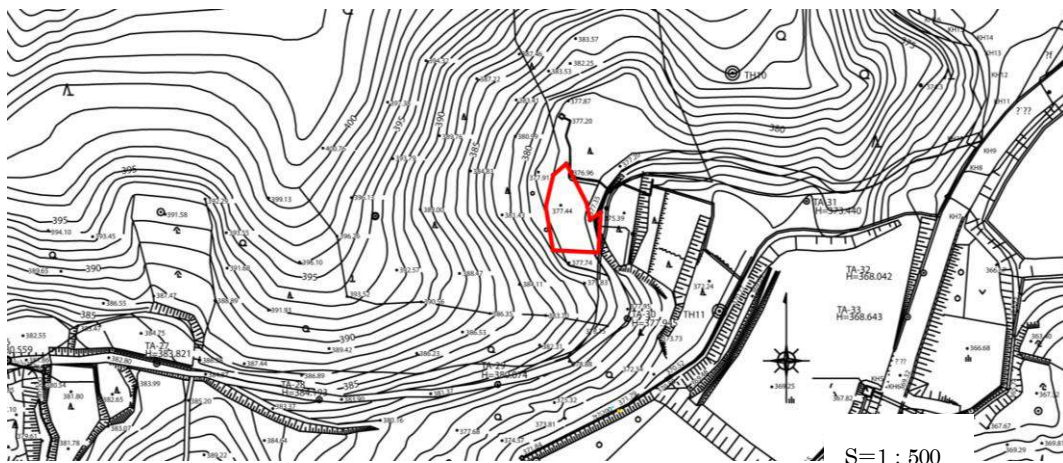
立地と環境 本遺跡は、谷間の斜面に立地しており、もともと屋敷地として造成された平地であったが、調査段階では主に杉を中心に植林された山林であった。標高は海拔 377m 前後である。周辺の遺跡としては東へ約 0.5km のところに日面遺跡・神田 B 遺跡、南西約 0.3km のところに中坂佐後遺跡がある。

調査の概要 本年度の調査面積は 100 m<sup>2</sup> であり、調査は屋敷地として造成された平坦面の南側 1/3 程の範囲を行った。調査では平坦部が山側を削り、その掘削土を中心に谷側に盛り土をして形成されていることが確認された。遺構としては複数の溝や土坑が検出され、山側には斜面からの雨水などを防ぐ目的で作られたと考えられる 001SD や 007SD が確認され、谷側の端部には 20 cm～30 cm 程度の石を土留めとしておいたと考えられる 010SS が検出された。遺物としては地山を削り込んだ部分では主に近世後半の陶磁器・土師器などが、整地土の中からは中世の山茶碗や青磁などが出土している。

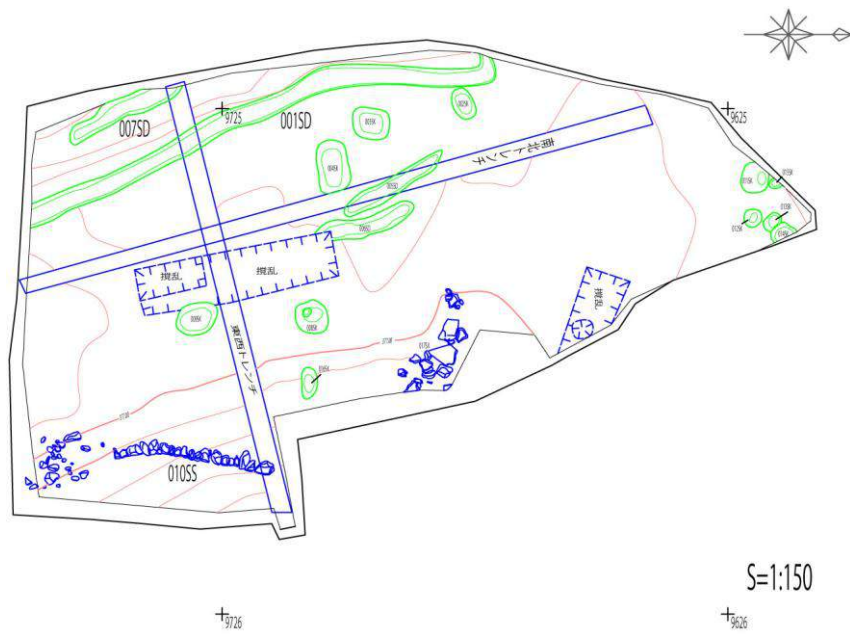
まとめ 今回の調査の結果、この範囲の平坦面の造成が、近世後半以降に中世の遺構などを削平して行われたものと考えられる。今回の調査で確認された 010SS は調査区北側で構築されている高さ約 2 m・と石積みと上面の高さが一致していることからこれらに先行するものもしくは同時期に構築されたものと考えられる。狭小な面積の調査ではあったが、山間地の土地利用のあり方を考える上での資料を得ることができた。(成瀬友弘)



調査地点 (国土地理院 1/2.5 万地形図「東大沼」)



神谷上切遺跡位置図



遺構平面図



神谷上切遺跡全景（南から）



001SD・007SD 完掘状況（南から）



010SS 検出状況（北東から）

## (2) 調査の成果

今年度の各遺跡の調査で検出した遺構および出土遺物は、縄文時代、平安時代を中心とする古代、中世から近世の時期に集約される。

### ① 縄文時代

日面遺跡では調査区北西端のA区黒色土層から、早期・後期にあたる土器や石器が出土した。また菅ノ口遺跡では調査区北東端で、晩期に相当する土器が出土した。いずれも調査区の周辺に遺跡が広がる可能性が考えられる。

### ② 古代

朴ノ木B遺跡では3棟、丸山A遺跡では1棟の竪穴建物を検出した。また柿根田遺跡C区・D区でも焼土を含む土抗を検出した。いずれも居住のあり方を示す貴重な成果と考えられる。柿根田遺跡A区では谷を囲むように溝を数条検出した。

出土遺物は碗、皿、瓶などの灰釉陶器、須恵器、土師質甕が多い。灰釉陶器は猿投窯黒笹 90 号窯式および折戸 53 号窯式の段階に絞られる。特徴的な遺物として、丸山A遺跡では底部に「春」と墨書された灰釉陶器が2点出土した。菅ノ口遺跡では明確な遺構に伴わないものの、緑釉陶器の破片が出土した。

### ③ 中世・近世

日面遺跡では南斜面に当たるA区・B区で中世以降斜面を削り出し、平坦面を広げていたことが埋土から出土する山茶碗から判明した。またC区・D区の成果から、平坦面は近世後期にかけて谷の南側に広げられたと考えられる。神谷上切遺跡でも狭小な調査範囲ながら、中世の遺構面を削平した近世以降の造成面を検出した。